

エジプト駐在武官

日誌(4)

ものふ
武士への作法

榊枝 宗男 陸自75

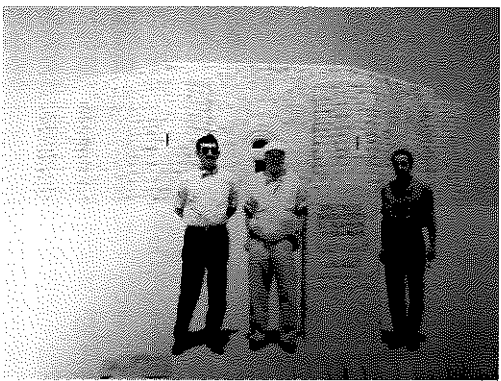
9月20日、市ヶ谷駐屯地にて平成29年度市ヶ谷台慰霊祭が執行された。毎年この式典では、メモリアルゾーンにおいて、慰霊も厳かに行われる。更に来年は靖國神社御創立150年記念事業が予定されている。毎年市ヶ谷台慰霊祭へ参列する機会を得る私は、エジプトのエルアラメインでの慰霊祭を思い出す。

コバルトブルーの地中海に望むエルアラメインは、第2次世界大戦の激戦地であった。1942年夏、エジプトを攻略しようとするロンメル将軍が率いるドイツ枢軸国が英国連邦軍により撃退され、双方で約8万名の死傷者が出た。そこは広大な砂漠地帯にあるが、北を地中海に、南をカタール湿原に挟まれた隘路である。この地において毎年10月ドイツ、イタリア、イギリスが持ち回りで、イギリスのメジャー首相(当時)やドイツ国防大臣はじめ各国首脳も参列して合同慰霊祭を盛大に行っている。

特に目を引くのは、日本と同じ敗戦国であるドイツの慰霊廟だ。一辺が5

mもある六角形の分厚い石壁で囲まれた重厚な建造物である。その中庭にはオリーブの葉で飾られ、壁の石版には戦死した約8千名の名前があり、中央の碑には「ドイツ国家の価値観のために勇敢にその命を捧げた将兵がここに眠る。われら国民は諸君達を永遠に忘れない」と記されている。本国から遠く5千km離れた灼熱のアフリカの砂漠で、毎年戦死者に敬意を払うため慰霊祭が行われている。

わが国でも戦争の当否と戦死者への敬意は別であるとする気持ちを持つことが、武士への作法と信ずる。



エルアラメインのドイツ慰霊廟前にて 筆者撮影